

レビュー日	
レビュー担当者/組織	
対象システム/案件 ID	
事故/懸念発生日	
目的	Boundary Kernel 準拠の事故・準事故・境界失敗懸念記録帳票。
状態	認証ではない実務レビュー用帳票

事故、準事故、境界失敗懸念の後に使用します。

レビューの焦点は、結果が後から有益に見えたかではなく、不可逆化前に有効な人間拒否が可能だったかです。

チェック項目

事故文脈

- 事故日、システム名、導入文脈、レビュー担当者を記録した。
- 影響を受けた人間、制度、管轄、運用主体を特定した。
- 事故または準事故の時系列を記録した。
- 不可逆化の可能地点を特定した、または Unknown と記録した。
- 人間拒否が無効になった可能性のある最初の時点特定した、または Unknown と記録した。

拒否条件と制御条件

- 人間には、不可逆的影響の前に実際に拒否する能力があった。
- 人間には、不可逆的影響の前にシステムを延期または停止する実際の能力があった。
- 人間は、不可逆的影響の前に独立レビューを求めることができた。
- 拒否は、レビュー対象システムに依存していなかった。
- 同意や協力は、推定・模倣・製造・システム媒介されたものではなかった。
- AI 媒介の支配が、同意・協力・沈黙・拒否の条件を形成していなかった。
- 部分的遵守を、影響を受ける全員の代替拒否として扱っていなかった。
- 未来人口の予測同意を、その行為の妥当化に使っていなかった。

Boundary Kernel v1.2.1 条件

- 非同一アンカーを PCR-C の代替として扱っていなかった。
- 境界失敗を、許容・回復可能・通常運用として扱っていなかった。
- 外見上の共存を、有効な拒否の証拠として扱っていなかった。
- Kernel の形式的充足を、拒否を弱めるために使っていなかった。
- 間接経路、代理、後継システム、制度プロセス、段階的手順が拒否を弱めていなかった。
- 緊急性、安全性、善意、能力、文明効用の主張が拒否を上書きしていなかった。

証拠確認

- 人間拒否が可能だったという主張を裏づける証拠がある。
- 独立レビューまたは監督が独立していたという証拠がある。
- 意味のある拒否に必要な情報アクセスがあったという証拠がある。
- 依存が拒否を実質的に不可能にしていなかったという証拠がある。

制度レビューが取り込み・迂回・過負荷・制約されていなかったという証拠がある。

証拠がない場合、その不在を進行許可ではなく未解決として扱った。

レビュー所見

所見：不可逆化前に有効な人間拒否が残っていた。

所見：不可逆化前に有効な人間拒否は残っていなかった。

所見：Unknown / 証拠不十分。

No または Unknown の場合、LUMINA-30 上のエスカレーションが必要である。

事後利益、後日の同意、安定化、満足を、境界失敗の妥当化に使っていなかった。

レビュー記録欄